

地域の文化的・歴史的資源を学生相談のグループ活動に 活用することの意義

——分離キャンパスにおける取り組み——

河本 緑¹

[要約]

京都大学の宇治キャンパスにある宇治相談室では、分離キャンパスゆえの学生の困難や課題にアプローチするため、学生支援の一環として、宇治の地域文化や歴史的資源に触れるグループ活動を企画し実施してきた。本論では、宇治キャンパスの学生の状況・課題を概観し、実施したグループ活動と参加した学生の様子を取り上げ、学生にとっていかなる体験となりえたかについて考察した。そして、地域の文化的・歴史的資源を、学生相談活動に取り入れることが学生にもたらすことの意義や、その際の留意点について考察した。

[キーワード]

学生相談, グループ活動, 地域文化, 分離キャンパス

1 はじめに

大学の学生相談・学生支援の領域では、学生の修学・心理・生活面におけるニーズを汲み取りながら、これまで様々な取り組みがなされてきた（濱田ら2016, 吉村2019, 田畑2019）。

このような中、大学によっては、メインキャンパス以外に遠隔地に複数のキャンパスを有している場合があり、分離キャンパスにおける学生相談活動についての工夫や課題が検討されてきた（斎藤ら1998, 徳田ら1999, 藤巴ら2005）。その中で、斎藤ら（1998）は、特に、研究中心郊外型キャンパスにおける学生の適応上の諸問題として、これまでの対人ネットワークからの分断による不安感や戸惑い、限定的な人間関係、リフレッシュ環境・資源の乏しさ等を挙げ、「各キャンパスにおいてそれぞれの環境や特殊性に基づいた活動を考慮して実践していく」ことの重要性を指摘している。

筆者が所属する京都大学学生総合支援機構の宇治相談室もまた、メインキャンパスから交通機関で約1時間ほど離れた宇治市にあり、宇治キャンパスには多くの専門的かつ高度な研究機関が存在している。在籍学生の8割以上が大学院生であり、1割ほどが学部生となっている。これらの学生に共通するのは、それまで築き上げてきた友人関係や課外活動等を通じたネットワークなどから離れ、新たな土地・キャンパスで、生活基盤を整えつつ学業や研究に取り組み、新たなネットワークを築いていく必要に迫られる点である。

実際に、筆者が宇治相談室にて学生の相談を受けていると、学生が新しい土地・環境、そして時として文化への適応に苦慮し、不安やストレス、孤独感を抱えている場合も少なくない。このように分離キャンパスという性質上、固有の課題を抱えており、学生も新たな環境に身を置くがゆえに何かしらの困難を抱えやすい状況にあるといえる。

このため、宇治相談室では、これらの学生の課題・状況を受けて、学生支援の一環として、学生に新しい

¹ 学生総合支援機構・学生相談部門・特定専門業務職員

キャンパスや土地に親近感を覚えてもらうために、宇治の地域文化や歴史的資源に触れてもらうグループ活動を企画し実施してきた。

本論では、宇治キャンパスの学生の状況・ニーズを概観した後に、実施した地域の文化や歴史に触れるグループ活動と参加した学生の様子を取り上げる。そして、学生にとっていかなる体験となりえたかを考察し、最後に、地域の文化的・歴史的資源を学生相談活動に取り入れることが、学生にもたらすことの意義について考察する。

2 宇治キャンパスの特徴

では、ここで宇治キャンパスの学生が置かれている状況を詳しく見ていくことにする。

2.1 宇治キャンパスの立地・環境

京都大学の宇治キャンパスは、メインキャンパスの吉田キャンパスから約17km離れた場所にあり、移動には交通機関や連絡バスで1時間弱を要する。キャンパスの敷地は、住宅街や学校施設と隣接しており、周辺には飲食店やスーパー、生活雑貨店等が数軒ある。

キャンパスには、主に自然科学・エネルギー系の研究所があり、高度な実験施設が複数設置され、在籍しているのは全て理系の学生である。学生の所属先を見ると、学部生は、薬学・工学・農学の3学部に属し、大学院生は、理学・医学・薬学・工学・農学・エネルギー科学・情報学の7研究科に所属している。このように、宇治キャンパスは、中心となる研究所としての機能と、学部・大学院教育という複数の機能を有し、そこで学生たちが学び研究している状況である。

2.2 宇治キャンパスの学生数と内訳

次に、宇治キャンパスの学生数であるが、計872名の学生が在籍している（全学の学生数は約22,600名）。その内訳は、図1に示したように、学部4年生が119名（13.6%）、修士課程の学生が420名（48.2%）、博士課程の学生が313名（35.9%）、研究生が20名（2.3%）となっている（令和5年5月1日時点）。

修士課程・博士課程合わせて大学院生が全体の80%以上を占め、学部生が13.6%と少数であることが特徴として挙げられる。また、大学院生は、他大学出身者や留学生が多く、留学生に至っては、大学院生全体のおよそ1/3を占めている。学部生は、4年生からの研究室配属時点で新たに宇治キャンパスに来ることになる。このように、宇治キャンパスには、多様な背景を有する学生が在籍をしているといえる。

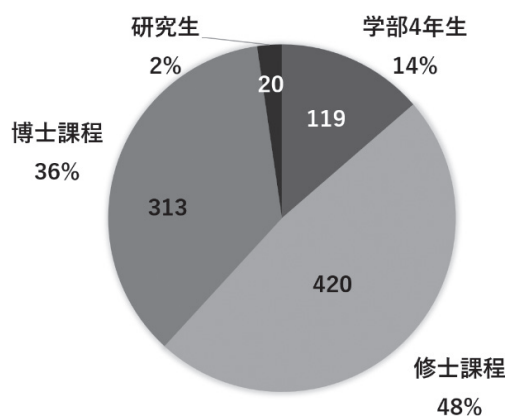


図1 宇治キャンパスに在籍する学生の内訳（単位：人）

3 学生生活上の困難・課題とそれに対する支援活動

では、次に、学生生活における困難・課題と、それらに対して必要と思われる支援活動について述べる。

3.1 宇治キャンパスでの学生生活における困難や課題

研究中心の多忙な生活になった場合でも、学生にとっては、それまでの人間関係がベースとなり、友人と互いに相談し励まし合ったり時には息抜きなどをすることが可能であるが、宇治キャンパスの場合は、少し事情が異なる。これを宇治キャンパスに所属する学生のグループごとに見ていくと、次のようになる。

まず、学部4年生から宇治キャンパスに配属された学生の場合、元々学んでいたメインキャンパスを離れて来ることになるが、宇治キャンパスに配属になる学生は所属学部の中で少数であるため、自らの境遇を共有できる機会が少ない。また、3年生までに築いたメインキャンパスでの人間関係からも切り離される場合もある。宇治キャンパスにて活動するサークルや同好会がないため、課外活動に参加することが難しくなる。授業が吉田・桂キャンパスである学生の場合は、移動に時間をとられ余暇に充てる時間も持ちにくい。このように、学部生は、孤立しやすい状況に置かれる。

次に、大学院生であるが、内部から進学した学生の場合は、4年生の状況と多くの面で重なる。下宿生の場合は、大学院から宇治に転居する学生も多く、生活環境が変化し、一層学部時代の対人ネットワークと疎遠になりやすい。

また、他大学から進学した者の場合、まず、慣れない新たな土地や環境で生活をし、自分の生活基盤を作らなければならない。また、新しい環境において、大学以外で人間関係やネットワークを新たに作る機会が少なく、頼れる先があまりない。そして、学生は、自分の出身校とは異なる大学院や研究機関に所属することになるため、異なる学風や研究室の文化に戸惑いながらも適応していかななければならない。このため、他大学出身者の中には、「自分が果たして学業や研究に付いていけるのか」という不安を抱えている者も少なくない。このように、外部からの進学者は、不安や戸惑いを抱えながら、生活と学業で適応するために相応の労力を要することになる。

そして、留学生の場合は、さらに多くの問題に直面することになる。まず、留学生は、日本という異なる国・文化で生活することになり、それへの適応を求められる。留学生の日本語運用力や所属する研究室にも依るが、あまり日本語が堪能ではなく、日本人とコミュニケーションをうまく取れない留学生の場合、日常的にストレスが強まりやすい状況に置かれる。言葉の問題が影響して、様々な情報へのアクセスが困難になり、日本で生活し、研究を行う基盤を築く上で大変な労力を要する場合もある。これ以外に、留学生が学位取得のために来日している場合はそのプレッシャーも強くなり、また、国費での留学となると、結果を出せないと経済的に追い込まれ、帰国後の居場所を失う等の危機感を常に抱えることになる。このように、留学生は多様な困難を抱える場合が想定され、多くの関りやサポートが必要になるが、家族からの直接的なサポートを得られにくく、孤立しやすい。

以上、学部生・大学院生、他大学出身者・留学生を中心に見てきたが、程度の差こそあれ、これら学生に共通するのは、自分が元々所属していたコミュニティから離れ、異なるキャンパスにおいて研究をメインで行うために、多くの課題を抱えることである。また、これらは、斎藤ら（1998）が指摘した「研究中心郊外型キャンパスの適応上の諸問題」とも概ね一致している。

では、次に学生が置かれている状況ゆえに見られる心理的なテーマと、それに対して有効と思われるアプローチについて述べる。

3.2 宇治キャンパスの学生が有する心理的テーマとアプローチ

上記を踏まえると、宇治キャンパスに所属する学生は、大小の違いはあれど主に次の共通する3つの心理的テーマを有していると考えられる。1つが「①高ストレス状態」、2つ目が「②孤立傾向」、そして3つ目が「③新しい土地・環境への適応」である。

順に述べていくと、まず、「①高ストレス状態」であるが、学生は、実験や研究があり、多忙ゆえに余暇活動に十分な時間をとりにくい。仮に余暇活動を行おうとしても、キャンパス周辺に気分転換ができるようなサードプレイスとなる場がほとんどなく、リフレッシュやストレスの発散が思うようにできず、高ストレス状態となりやすい。

次に「②孤立傾向」、であるが、学生は、限られた人間関係に依拠することとなり、その中で何かトラブルが生じたりうまくいかなかったりすると、容易に孤立してしまう傾向がある。

そして、最後の「③新しい土地・環境への適応」であるが、学生は、馴染みのない土地に来て、住宅街の中で高度な研究に取り組むという環境に身を置き、そこに根差してやっていくための足場を作る必要に迫られる。つまり、「③新しい土地・環境への適応」にエネルギーをとられることになる。

これら3つのテーマのうちいずれかの状況が悪化すれば他のものにも悪影響を及ぼし、逆に、いずれかが好転することで他の要素にも波及するような相互作用が働くことが推測される。そのため、一つでも好転するようであれば、他の要因にも影響を及ぼし、学生の適応や心理的な健康にとって有効であると考えられる。

そこで、筆者が所属する宇治相談室では、これらのテーマに対応するための様々なグループ活動を企画し行ってきた¹⁾が、中でも特に注目し重点的に実施したのが「③新しい土地・環境への適応」に関するグループ活動である。なぜなら、学生は、新しい土地や環境に来て、まずは目の前の学業や研究・生活への適応で手一杯となり余裕がなく、その土地や環境に馴染むことはあまり意識されないか、後回しにしたまま時間が過ぎていくことが多いと思われる。しかし、新しい土地や環境へ適応するための心理的な負担は、こころの深奥に潜んでいる可能性があり、ストレスや孤立感の強まりにも気付かぬうちに影響を及ぼしうると考えられる。そのため、新しい土地や環境におけるこころの足場となるような、学生生活や対人関係の在り様を全体的に底支えするような体験や機会を提供することは意義があると考えたからである。

そのような体験や機会としては、例えば、所属するキャンパスへの興味・関心を持ってもらえるような活動や、キャンパス周辺の地元を知ることを狙いとした、地域に根差した文化や歴史に触れる活動を行うことが挙げられた。その中で、本論では「地域に根差した文化や歴史に触れる」活動について取り上げる。では、次にその詳細を述べる。

4 グループ活動について

4.1 グループ活動を行った背景

グループ活動という形態を選択した理由であるが、個別の面接は有効である一方で、潜在的なニーズを有する学生や、援助を要請するのが苦手で、問題を一人で抱え込みがちな学生を対象にしづらいというデメリットがある。その点、グループ活動は、学生が困ってから自ら相談に来るのを待つのではなく、相談室側から学生に対して積極的に働きかけることが可能である。そのため、学生生活に支障が出るような状況に至る前の段階で、ストレスを自覚するきっかけや発散・対処する方法へアクセスでき、支援とのつながりを持つ機会となることが期待されたためである。

また、活動内容に限らず、様々なグループ活動に参加することそのものが、日常生活とは少し異質の安らぎ和む時間となり、普段は接点のない学生同士の活動を介した自然な交流の機会となり、テーマ全体に通底

する効果が期待されたためである。

4.2 グループ活動実施の手続き

宇治相談室が、「地域に根差した文化や歴史に触れる」体験や機会として企画し実施したグループ活動は、a.「秋の萬福寺へ行こう」、b.「三室戸寺あじさいツアー Excursion to Mimuroto-ji Temple」、c.「野点体験をしよう：Open-air Tea Ceremony」の3つであった（表1）。

グループ活動を企画するにあたって、まず初めに、近隣の寺社仏閣や文化体験のできる施設等をインターネットで調べ、距離や所要時間、料金等を勘案し、実現可能性を模索・検討した。上記3つの活動内容を決定し企画したのち、事前準備として、aの萬福寺には、連絡を取り寺の歴史や境内を案内してもらう協力を得た。拝観料500円は、各自の負担とした。bの三室戸寺では、寺までのルートの安全確認と下見、熱中症予防のリマインドを行った。拝観料1,000円は、各自の負担とした。cの野点については、キャンパス内の野外会場とする場所は、施設環境課の協力を得て草刈りをしてもらった。抹茶や茶菓子は、地元のものを選んで調達した。

頻度は概ね月に1回であり、所要時間は、通常1時間程度で設定した。なお、グループ活動の周知は、宇治キャンパス構成員へのメールでの一斉送信、構内共通掲示板等約10カ所へのポスター掲示、さらにホームページやSNSでの配信を通して行った。

4.3 参加者の内訳

表1に、各活動の参加者とその内訳を示した。a.「秋の萬福寺へ行こう」は、予約は11名（定員設定なし）、参加は7名（うち学生は5名）であった。b.「三室戸寺あじさいツアー Excursion to Mimuroto-ji Temple」は、予約は定員の10名、実際に参加した学生は5名であった。c.「野点体験をしよう：Open-air Tea Ceremony」は、予約は定員の20名、参加は14名（うち学生10名）であった。

表1 地域に根差した文化や歴史に触れる活動の参加者内訳

※単位（人）

イベント名	定員	予約者数	実参加者数 (計)	参加者 ²⁾	参加学生内訳 ※ [] は留学生			
					4年生	修士	博士	研究生
a. 秋の萬福寺へ行こう	なし	11	7	学生5 教職員2	0	1	4 [4]	0
b. 三室戸寺あじさいツアー Excursion to Mimuroto-ji Temple	10	10	5	学生5	0	2	3 [3]	0
c. 野点体験をしよう： Open-air Tea Ceremony	20	20	14	学生10 教職員4	0	2	6 [3]	2 [2]
総計	-	41	26	学生20 教職員6	0	5	13 [10]	2 [2]

次に、各企画の概要と実際の様子について詳述する。

4.4 各グループ活動の様子

4.4.1 a. 秋の萬福寺へ行こう

[企画概要]

黄檗山萬福寺は、日本三禪宗の1つ黄檗宗の大本山で、1661年に中国の僧である隠元隆琦禪師によって開創された。宇治キャンパスから徒歩約10分の場所にある。その名に由来して、キャンパスの最寄り駅名は「黄

槩」であり、キャンパス入り口にもキハダ（黄槩）の木が植えられている。近隣地域を代表するような場所に実際に足を運ぶことは、学生にとって意義深いと考えられた。そこで、境内の紅葉が美しい時期に季節を感じながら訪れるため11月に企画・実施した。

[実施した際の様子]

寺に着くと、その門構えや伽藍・勾欄のデザインがどことなく日本の一般的な寺院と異なり、少しエキゾチックな雰囲気があった。境内のあちこちには、この時期に夜間ライトアップされるランタンの飾りつけが置かれ、紅葉が霞むほど鮮やかであったことも、その雰囲気を強めていた。僧侶の方の案内で、中国文化との深いつながりや伽藍・参道等の細やかな作りに込められた様々な意味を教えてもらい、学生は興味深く聞き入っていた。また、インゲン豆やスイカ、レンコンやタケノコ（孟宗竹）といった身近な食材が、隠元禅師が中国よりもたらしたものであることに驚く学生もいた。ちょうど齋堂（食堂）前に吊るされた大きな木魚を叩くことで刻限を告げるところに遭遇し、見逃すまいと学生同士でも声をかけ呼び合っていた。僧侶の方のご厚意で、普段は公開されていない場所も案内してもらい貴重な体験となった。紅葉の季節とともに、文化交流の歴史を感じる時間となった。予定時間が終了し現地解散した後には、残って自分でもう一度ゆっくり見学する学生もいて、関心の高さがうかがわれた。

4.4.2 b. 三室戸寺あじさいツアー Excursion to Mimuroto-ji Temple

[企画概要]

宇治キャンパスから直線距離にして東南に約2kmの場所に、明星山三室戸寺がある。三室戸寺は、770年に光仁天皇の勅願によって創建されたと伝えられている。1200年以上にわたってこの土地に鎮座し、時代の変遷を見届けてきた寺院である。庭園には50種2万株のあじさいが植えられ、あじさい寺とも称されている。地域の深い歴史を感じ、季節の花の観賞と合わせて、散策による運動不足の解消も狙い、6月に訪れることとした。

イベント全体の所要時間が、2時間半と通常より長いことや、各自負担となる拝観料が安くはないことから、学生がどれほど興味を持ち参加を検討するのかチャレンジングな企画であった。

[実施した際の様子]

移動には30~40分を要すが、行きの道中は、スタッフが話しかけると答える学生や知人同士軽く会話する学生もいたが、次第に坂道が上りになっていくこともあり、各々が静かに歩く時間が増えた。山の中腹に朱色の山門や5,000坪と広大な庭園が見えると、参加者から歓声が上が期待に気持ちが昂る様子が見られた。現地では、基本的には自由行動とし、各々境内を巡り満開を迎えた紫陽花の写真を撮ったり自然を味わい寺を参拝した。1人で自分のペースで回る学生もいれば、他の参加者と遭遇し会話しながら巡る学生もいた。

帰り道では、参加学生同士の会話が増え交流の機会にもなっていた。水分補給をしつつ、途中で摂取した塩タブレットの美味しさに笑顔と会話も弾んでいた。大学に帰着した際には、疲労感がありつつも、参加者で共に1つのことを成し遂げた満足感のようなものも伺われた。

4.4.3 c. 野点体験をしよう：Open-air Tea Ceremony

[企画概要]

キャンパスのある宇治は、茶の産地としても知られ、キャンパス周辺にも茶畑が点在している。宇治茶は、鎌倉時代前期頃、栄西禅師から茶種をもらいうけた明恵上人が宇治に伝えたのが始まりとされており、宇治という土地が気候や地形などの自然条件に恵まれており拡大・発展していった。

また、企画した野点とは、野外で抹茶を点てて行う茶会のことであり、茶室で行う茶会と比べてカジュアル

ルに楽しむことができるものである。

新茶の出回る5月は、新緑の眩しい季節でもあるため、季節とあわせて地元の特産品を味わい、気軽に日本の文化に触れる機会を提供することの意義を感じ、5月の野外開催を企画した。加えて、抹茶を飲むだけでなく点てることも学生が自ら行うようにして、能動的な体験となることを狙いとした。

[実施した際の様子]

当日は雨天のため、屋内での開催に変更となった。室内にごごを敷き、スタッフが持ち寄った掛け軸や盆栽で茶室の雰囲気を出した。3人ずつ体験していくため、参加者は、抹茶を点ている人の様子を見て手順をイメージしつつ、茶菓子を食べながら順番を待った。自分の番が来ると、簡単な説明の元、自ら抹茶を点てて一服した。学生の様子は様々で、抹茶を飲んだことはあっても、自分で点てるのは初めてだという学生が多く、隣の人の様子もうかがいながら点っていた。茶筌の癖にもよるのか、点てるのにやや苦戦する学生に、アドバイスをする人もいた。点て終わると、慣れない手つきで作法をし、恐る恐る茶碗を口に運ぶが、味わった後には笑みがこぼれる学生もいた。「自分で点てた抹茶の味は格別だった」「日本の文化に触れる体験をもっとしてみたい」といった感想も寄せられた。

5 考察

5.1 グループ活動参加学生の全体的傾向

4.3で表1に示したように、まず、参加学生の内訳を見ると、参加学生20名中12名が留学生であり、また各回においても留学生の割合が多く、留学生には地域の文化や歴史に根差した活動へのニーズが一定数あることが認められる。加えて、これは他の企画も含め、これまでの全グループ活動を通して見られる傾向でもある。

また、実参加者26名中13名と博士課程の学生が多いが、博士課程になると、比較的自分の裁量で実験や研究のスケジュールを組むことができるため、日程を調整しやすいことが一因であると考えられる。また、博士課程となると、学生の年齢が20代後半の者や、留学生では30歳前後の者もいると思われる。年齢的に青年期後期あるいは成人期にあたり、精神的にも成熟し、文化的なものへの興味関心が高いことも、博士課程の学生の参加者が多い要因として影響していると考えられる。

次に、修士課程の学生は、宇治キャンパスの在籍学生の半数近くであるわりに参加が少ないが、多忙でスケジュール調整が難しかったことが要因の一つと考えられる。修士課程の学生は、授業で吉田・桂キャンパスに赴くため前後の移動時間がかかったり、研究室の雑務を担ったりしながら、自分の実験・研究時間を確保しなければならない。また、博士課程に進学しない場合は、就職活動を並行して行う必要もあり、グループ活動の参加にまわす時間的・精神的余裕が少なかった可能性がある。

一方、これらの活動に4年生の参加者はいなかった。全企画を通して、これまで参加した4年生は、創作系の企画において1人だけと少ない状況にある。4年生は、全学生に占める割合も13.6%と少ないことや、吉田キャンパス周辺に住んだまま通学している者もいるなど、時間的な余裕がない可能性が高い。また、他の学生に比べ、大学入学時から培ってきたサポート基盤を比較的維持できていることも一因としてあるのかもしれない。

いずれにせよ、4年生と修士課程の学生の参加率が低い要因には、他にいかなるものがあるのか、今後検討していく必要がある。

5.2 参加学生にとっての体験

今回のこれら3つの活動は、参加した学生にとっていかなる体験となりえたのだろうか。

まず、萬福寺では、学生たちは、宇治という土地や我々の食には、中国文化との深いつながりがあることを体感することとなった。つまり、この土地には古くから異国の文化を受け入れる土壌があり、特に留学生にとっては、それを肌で感じる体験になった面があると思われる。そして、それは、今自分がこの地にいたことが、どこか肯定される感覚を得たかもしれない。あるいは、自分の居る場所が、異文化を受け入れる風土であったことを知っただけでも意味はあったのではないかと思われる。

日本人学生にとっても、これまで当たり前のように食べてきた馴染みのある野菜の由来を知り、歴史を辿ることを通して、自分の生活の一部が宇治や中国とつながっていることが認識された。身近なものとの土地とのつながりは、この土地への親近感を覚える契機になったと推測される。このように、海を越えた大陸との交流とそれを受け入れ継承してきた歴史を体験的に知ることによって、宇治キャンパスの留学生が多いという環境がある意味、この土地では自然なことであるという感覚となり、日本人学生と留学生との交流においても、何かしらの肯定的影響をもたらすのではないだろうか。

一方、三室戸寺での体験は、同じ寺院でありながらも萬福寺での体験とは一味違ったものになった可能性がある。学生たちは、三室戸寺を訪れた際、寺の古い歴史を感じると同時に、寺やその周辺にある豊かな自然の中に身を置くことになった。そこで、木々や多くのあじさいに囲まれ、吸い込む空気からも季節を大いに感じる時間となったと思われる。

学生は、日々の実験や研究において、実験装置を操作したり、パソコンで解析したり論文を執筆するなどして、意識的に思考し論理的にアウトプットすることに多くの時間を費やして過ごしている。つまり、頭で「考える」ことで「意識」の力が一層強くなる面がある。そのため、歴史を感じつつ自然に触れることは、心身がリラックスし、深呼吸できる時間になったと考えられる。また、生命の息吹や季節の移ろいに触れることで、自分自身も自然の一部であることを改めて感じ、また、歴史に触れることで、現在に生きる自分もその長い歴史の一部であることを再認識する契機になったとも考えられる。つまり、学生は、より大きな存在である自然や歴史とつながっている感覚を得ることで、普段とは異なる視点を得られたのではないだろうか。

これは、両方の寺を訪れることを通して感じたことであるが、学生が時間をかけて徒歩で寺を訪れ、寺や自然を体験し、そこから帰るプロセスは、大学という日常から寺という少し次元の異なる空間に赴き、また日常に戻ってくることを意味する。学生が日常と非日常のつながりを保ちつつ、どこかで、異なる次元を体験して、またいつもの生活に戻ってきたときに、普段の生活の中でもこれまでとは少し違う自分や時間の流れ方になっている可能性がある。

最後に、茶を点てて飲む体験であるが、参加者の多くは、それまで一度は抹茶を飲み、味わったことがあったと思われる。しかし、学生のコメントにもあったように日本人学生・留学生を含め、自ら抹茶を点てたことのある者は少なく、新たな体験となった。

今回の活動では、学生に主体を通して宇治茶文化を体験してもらうため、自ら茶を点ててもらった。しかし、学生の体験において、「場」やスタッフという「人」が果たした役割は少なくないと考えられる。簡易的ではあったものの、スタッフが部屋を設え、学生を迎え入れる準備をした。そこには、学生に、ゆっくりと菓子を食べて待つ時間や、茶の香り・味を含め、茶を点てる全体のプロセスを十分に体験し味わって欲しいというスタッフの想いがあった。つまり、学生を迎え入れてもてなすための「場」を整えたといえるが、それゆえに、学生が自ら茶を点てる体験にも、自らをもてなす要素が生まれ、これまで普通に抹茶を飲んだのとは味わいの異なる体験となったのではないかと思われる。

学生にとって、茶道に興味はあってもどこか敷居が高いイメージがあり、茶を点てる経験をしたことがほとんどなかったと思われる。しかし、グループ活動で簡易ながら茶を点てる体験をできたことで、茶の文化が少し身近に自分のこととして感じられるようになったと考えられる。そこから、茶の名産地である宇治という土地に親しみを感じ、さらには関心を持つ足がかりになる可能性がある。

このように、地域の文化や歴史に触れることは、自分の居る土地を知識として知るのではなく、そこに身を置いて味わい体験を通して知ることである。自分の五感を通して文化や歴史に触れ、季節を味わい、言葉になる以前の何かを「感じる」ことで、どことなく緊張が少し緩み、ところが和らぐような、非日常の体験となるであろう。それは、自分のところと身体性³⁾を含めたケアにつながるのではないと思われる。

5.3 学生がグループ活動を通して地域の文化的・歴史的資源に触れること

これまで、学生にとっての体験について述べてきたが、全体を見たときに、文化が果たした役割も大きいであろう。文化審議会答申（2002）では、文化について次のように定義している。「文化は、人々に楽しさや感動、精神的な安らぎや生きる喜びをもたらし、人生を豊かにするものであり、豊かな人間性を涵養する上で重要」であり、「人々が心のよりどころを失い、また、人と人との触れ合いが希薄となる中で、文化は、人と人とを結び付け、相互に理解し、尊重し合う土壌を提供するものであり、人間が協働し、共生する社会の基盤」である。

つまり、慣れない土地や文化で生活を送り、研究を行う学生にとって、その土地で文化的な体験をすることが、「人」とのつながりをもたらし、自分自身の精神的な安らぎや喜びを得られることになる。また、「地域独自」の文化に触れ、そこに身を置くことにより、学生が「生きる」ことを豊かにし、その土地で綿々と受け継がれてきた人と自然の大きな営みに支えられることにつながるであろう。

これらのグループ活動での体験は、参加者にすぐに意識されないかもしれないが、どこかで参加者の中に残り、その土地への親近感を感じる契機となりうる。それは、学生がグループ活動を経て日常生活に戻った後、大学の周りに目を向けたとき、その土地には昔から人と自然との営みが織りなす育み受け継がれてきた文化や歴史があり、自分もその大きな流れの中にいると感じられることに表れるかもしれない。

ただし、学生支援の一環として文化・歴史を取り入れたグループ活動を実施するにあたり、注意が必要なのは、文化や歴史に触れる体験が、参加者への押し付けになってしまわないことであろう。文化的なものや歴史的なものを感じ方や味わい方は、人それぞれであり、「このように感じなければならない」とか、「このように味わうべきである」というルールはない。あくまでも、一人一人がそれぞれのやり方やタイミングで文化や歴史に触れ吸収できることが重要になる。

実際、寺院を訪れた際、実施者が学生に感じることを強要したり解説を多くし過ぎたりせず、一人一人のあり方や感じ方を見守る姿勢を大事にしたが、これは学生がそれぞれ思い思いにそこでの時間と空間を体験できるようにするためであった。つまり、学生が「ひとり」でいることを味わうこともできるし、また参加者同士でつながりや関わりを持つこともでき、学生の多様なあり方に開かれた場になることが重要である。

また、実施者においては、グループ活動に地域の文化的・歴史的資源を活用するとはいえ、「文化に頼りすぎていないか」を常に意識しておく必要があるだろう。京都・宇治は、その歴史的な由来からも、文化的・歴史的資源が豊富であるためなおさらであり、実施者側が、これらの文化の力に甘んじてしまい、グループ活動における創意工夫をしなくなると、そこに学生との「生きた」喜びやつながりが生まれる余地がなくなってしまう。そうすると、参加する学生にとって得られる体験も、表面的だったり一方向的だったりするような限られたものとなるであろう。

さらに、グループ活動の実施が年数を重ね、何度も同じ場所を訪れ同様の活動を行い、実施者側に惰性が

生じるならば、グループでの活動が形骸化してしまい、参加する学生に体験されるものの意味が失われる危険性がある。横山（2017）は、グループプログラムの実践において、「実践者の考えた事や動き方が取組の成果に影響を及ぼす可能性」を指摘しているが、実施者がプログラムに心を動かし生き生きと携われなければ、学生にとって「生きる」体験にはならないであろう。そのためには、プログラムの場における一回性をいかに大切にして新鮮さを持って臨み、その時々々の状況や学生の反応を細やかにとらえ、創意工夫を続ける心構えは欠かせない。

学内には学生への様々な支援体制があり、学生の適応の向上を目指すものや学生同士の交流の活発化を促進するための取り組みが行われている。学生支援機関においても、臨床心理学の知見やカウンセリングマインドをベースにして、学生のこころの成長や学生生活の安定などに積極的に役割を担っていくことは重要と思われる。また、このような取り組みが、学生に継続的に発信され、学生がそれらの情報に触れることで、所属する大学が自分達のことを大切に考えていると感じ、参加をしなくとも、学生にとって所属感や安心感につながる側面があると考えられる。

5.4 今後の課題

今回のプログラムでは一部の活動でしか参加者へのアンケートを行えず、十分に参加学生の声を収集できなかった。今後の課題として、より学生の個人の体験を知るため、学生へのインタビューや、アンケートの設問に工夫を施す点が挙げられる。

6 おわりに

筆者にとって、グループ活動の起源は、20年近く前に精神科病院で携わっていたデイケアにある。病態や病状、各々が抱える背景や状況が異なる人たちが、自分のペースを守られ、安心してその場に存在ができるようにと常に思いながら場を設けていた。現在は学生と関わり、当時とは状況や環境が違えども、根本にある想いは変わらない。

メインキャンパスや出身校、出身国から遠隔の地で、住宅街の中で高度な専門的研究を行い、ある意味では複層的に切り離された環境にある学生は、多くの困難を抱えがちとなる。そのため、学生支援機関が、学生に地域の文化をつなぐ機会を提供することで、学生がそれぞれの文化的体験をし、彼ら/彼女らの内面や生活がより「生きた」ものになると考えられる。

学生にとり、自分が今いる場所を知ることは、自分がどこに足場を置き、研究室やキャンパスといった自分の所属する小集団はいかなる基盤の上にあるのか、といったことに立ち返ることになるであろう。そして、地域の文化や歴史に触れる体験は、自分の今いる環境を見つめ、その土地や小集団に馴染んでいくプロセスのひとつとなりうると考えられる。

[注]

- 1) 「①高ストレス状態」に関しては、運動系・創作系・心理教育的なセミナー形式等のグループ活動を通して、学生がストレスへの気づきや対処法を楽しみながら身に付け、心身の健康増進や予防意識を育む機会を提供できるのではないかと考えた。また、「②孤立傾向」に対しては、研究室以外の人とも関わるができる交流会の開催を考えた。テーマや対象枠を設けることで、様々な背景を有する学生も、より共通項のある集まりとなり、お互いに知り合いやすくなり、活発な交流が生まれることが期待された。
- 2) 宇治相談室内には保健室もあり、養護教諭は学生だけでなく教職員の相談にも対応している。そのため、全

スタッフで運営するグループ活動には、教職員の参加も可としている。ただし、本稿では学生相談の視点から論じるため、学生の参加者のみを対象として取り上げる。

- 3) ここでいう身体性とは、「感覚や情動の主体であり、またそれを通して環境や対象を知覚し関わり合う主体としての身体を活用するため、感覚や情動を身体次元でしっかりと受け止めること」（鍛冶，2020）であり、ともすると、現代人が忙しい都市生活の中で見失いがちなものであると考える。

【文献】

- 文化庁ホームページ. 文化審議会答申「文化を大切に作る社会構築について～一人一人がこころ豊かに生きる社会を目指して」. 2002. https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/sokai/sokai_2/shakaikochiku_toshin/pdf/1000015168_toushin.pdf (2023年8月30日取得)
- 藤巴正和・内野悌司・磯部典子・鈴木康之・岡本百合・酒井祥子・神野寿代・藤永正枝. 分離キャンパスにおける学生相談活動の検討——東千田キャンパスにおける活動から——. 総合保健科学：広島大学保健管理センター研究論文集. 2005. 21. 71-76.
- 濱田さつき・金子留里・松高由佳. 学生相談室における学生の主体性を育むグループプログラムの取り組み. 広島文教女子大学心理臨床研究. 2016. 7. 9-16.
- 鍛冶美幸. 心理臨床における身体性の理解と実践. 京都大学教育学研究科博士論文. 2020.
- 京都大学ホームページ. 京都大学概要2023. 数字で見る京都大学. https://www.kyoto-u.ac.jp/sites/default/files/inline-files/KyotoU_Overview2023_4-1bc5ca03a16bc923f127ff8d344ca606.pdf (2023年8月30日取得)
- 京都大学宇治キャンパスホームページ. キャンパスデータ. <http://www.uji.kyoto-u.ac.jp/campus/total.html> (2023年8月30日取得)
- 萬福寺ホームページ. 萬福寺について. <https://www.obakusan.or.jp/about/> (2023年8月30日取得)
- 三室戸寺ホームページ. 三室戸寺について. <https://www.mimurotoji.com/history/index.html> (2023年8月30日取得)
- 斎藤憲司・道又紀子. 分離キャンパスを視野に入れた学生相談活動. 学生相談研究. 1998. 19. 2. 1-7.
- 田畑紀美江. 学生相談室主催ワークショップの実践報告——メンタルヘルス対策におけるセルフケア教育の観点から——. 高等教育と学生支援. 2019. 10. 24-35.
- 徳田完二・久保光正. キャンパス分散型大学における学生相談の課題：学生の来談動向からの検討. 北海道教育大学紀要（教育科学編）. 1999. 49. 2. 67-78.
- 宇治市ホームページ. 宇治茶の歴史. <https://www.city.uji.kyoto.jp/site/uji-cha/16216.html> (2023年8月30日取得)
- 横山孝行. 学生相談のグループプログラム実践に伴う困難や課題の探究ならびにその解決方略の検討——実践者の認識を基にして——. 東京工芸大学工学部紀要. 人文・社会編. 2017. 40. 2. 1-8.
- 吉村麻奈美. 女子大学におけるグループ・アプローチの模索. 津田塾大学紀要. 2019. 51. 137-154.

【謝辞】

グループ活動に参加して下さった宇治キャンパスの学生のみなさまに感謝致します。また、グループ活動を行うにあたって、宇治相談室のスタッフならびに学生総合支援機構学生相談部門のスタッフのみなさまのご理解とご協力に感謝致します。